

Dombey and Son における 人間像について

浜 田 公 一

Dickens の作品を我々が考える場合、彼の生きた時代を無視することは不可能である。しかし一般に一人の作家が時代の影響を受けた、という事実は何を意味するのだろうか。たとえば Dickens の場合彼が十九世紀の下層階級の人々を愛し、庶民の哀歎を描き、又当時のさまざまな社会の不合理（法律の矛盾、役人の横暴、金持の俗物根性等）に対する怒りを作品によって示した、という見方である。以下に示す一文は、もっとも一般的な Dickens 評の一例である。

His satires on poor law institutions, Chancery, and judicial procedure in general profiteering private schools, and many other social ills of his times are well known. Having been a poor boy himself he had an instinctive and burning sympathy with the poor. He gloried in the broad humanity, the patience, good-nature, and good-humour of the poor, even while laughing at their foibles, conceits, and oddities. His significance is not that he propounded any programme of social reforms or political improvements, but simply that he painted, for all to appreciate and enjoy, a vivid picture of working class folk whose poverty could be seen not as a penalty from heaven or the punishment of sin, but as the product of bad social conditions and the consequence of man's inhumanity.¹

こういう概括的な Dickens の見方にもとづいて、作家が時代から受けた影響をおしはかることには危険があると思うのである。上の文章は Dickens 評の一つの公式である。この文章が Dickens についての正確な見方を伝えていない理由は一人の人間と社会との関係を簡明に割り切っている点にあると思われる。

社会と人間（作家）との関係は全体と個の関係といえよう。全体と個との関係は全体が個を圧迫する、個が全体に対して反撥する、そして個が敗北する、あるいは色々な迷い、懷疑をもちながらも全体の流れに妥協する、このように関係の仕方には様々な変化があるのである。

It (*Dombey and Son*) regards the course of human life in terms of circumstance, of events, forces and laws which are beyond the control of the individual person and indifferent to him. And it is concerned not only with the grand inevitabilities of human experience, but with a kind of compromise and reconciliation they require. In short, it is concerned with blunt necessity and mute submission.²

これは Steven Marcus の *Dombey and Son* 論の一節であるが、文中の circumstance, events, forces, laws 等は一括して社会という意味に考えられる。Steven Marcus は *Dombey and Son* (1848) を人間が社会環境に圧迫され、それに屈従し妥協する過程として見ているようである。こういう宿命論の見方にはかならずしも賛成しがたいが、Dickens の作品を社会と人間との関係において見ながらも、はじめに引用した文章のような常識的見解でなく、全体と個との関係を厳密に見きわめようとしていることは明らかである。

Dickens にはたしかに十九世紀のイギリス社会の種々な歪みに対する憤りがあった。公然とおこなわれる不正を憎み、世の悪と戦うという一面があった。たとえば *Oliver Twist* (1838) については The core of the novel, and what gives it value, is its consideration of the plight of the

poor.³ という評価がなされているのである。

しかし、これから考えようとする *Dombey and Son* においては Dickens はこのような social reformer としての面でなくある特定の社会環境の中におかれた人物は、人間形成の上にその環境のために、どういう影響をうけるか、その人物はあたえられた社会環境の中でいかなる人間性を植えつけられ、それをいかに育てたか、さらに、その人間性はどのような到達点にたっしたか、というように社会環境を人間性を規定する上での決定的要素と考え、それと人間との相互関係を見極めているのである。

In so far as *Dombey and Son* is a 'social novel', its prevailing mood is one of deep disquiet about contemporary values, a suggestion that more is amiss with them than mere exposure and reform can hope to touch. Dickens had formerly presented the wealthy man as a benevolent fairy godmother or Father Christmas, in Mr. Blowlow, Abel Garland, or the Cheeryble brothers. There would be no place for such characters here. *Dombey and Son* suggests the gloom of wealth and its capacity to petrify or poison human relations, in the family and in society.⁴

Dombey and Son を社会小説とみることには一概に賛成できないが、この文章は Dickens が *Oliver Twist* とか *A Christmas Carol* (1843) をかいた当時の社会の改革を信じ憧憬する態度から次第に変化したことを示している。社会環境の弊害 (*Dombey and Son* の場合は物質と富を万能とする社会思潮) は単なる楽天主義的理想、又は改革のためのアピール等では解決されない程に深刻なものである、という認識が Dickens の中に深まって来たのである。

Dombey and Son の主人公 Dombey の wealth を唯一の信念とするエゴイズムは彼の家庭、人間関係を歪め、さらに彼自身をも苦しめるのである。Dickens の社会観念と人間観が初期の肯定的なものから否定的な絶望

感をもったものになって来たといえよう。

Dombey and Son が Dickens の初期の作品とことなる所は環境と無縁ではおれない人間の意識と行動の問題を追求している点である。前に引用した文章 (No. 4) の中の ‘*Dombey and Son* suggests the gloom of wealth.’ という言葉は物質的富を絶対とする時代に生れ、富を信じ行動した一人の人間の意識の過程と結果を暗示している。*Oliver Twist* においては主人公 Oliver は最後までまわりの社会悪に影響されずに生きぬくことが出来たけれども、*Dombey and Son* では人間の精神の内部にまで侵入してくる時代思潮の力を Dickens は再認識せざるを得なかったのである。

Dombey and Son の主人公 Dombey がいかなる人間性を持ち、それは十九世紀の中頃の時代思潮からいかなる影響をうけ形成されたかを考えるためには、その当時の時代思潮をまず見てみる必要がある。

The background of mid-Victorianism is growing material prosperity, and a level of industrial production and foreign trade which set England far ahead of all other countries.⁵

ヴィクトリア時代中期は物質主義の時代であり、イギリス帝国が物質文明を世界に誇示した時代である。又当時はそれまでの農村生活人口が新興都市の機械工業に吸収され、人々は先をあらそって都会 (London) へ殺到した時代であった。次の引用文は *Dombey and Son* の中の一節である。

Day after day, such travellers crept past, but always in one direction — always towards the town. Swallowed up in one phase or other of its immensity, towards which they seemed impelled by a desperate fascination, they never returned. Food for the hospitals, the churchyards, the prisons, the river, fever, madness, vice, and death, — they passed on to the monster, roaring in the distance, and were lost.⁶

都会は material progress⁷ と繁栄のシンボルであったがそこに住む個々の人間の生活は悲惨をきわめた。都会は淳朴な田舎の人々を無制限にのみこんで、死者、犯罪者、病人等として彼等を排泄する the monster にひとしかった。

表面的な繁栄を誇った都会はこうした労働者たちの harsh sweated labour⁸ に支えられて実業家、商人 (business men) のみが物質的な富を享受し活躍したのである。「利己的な潤いに欠けた個人主義、具体実証的な典型の商業的、工業的な歪曲⁹」とはルイ・カザミアンが指摘した当時の実業家、商人の気質である。

しかし実業家、商人が「利己的な潤いに欠けた個人主義(者)」にならざるを得なかった理由の一つは commercial laissez-faire (商業の無干渉主義¹⁰) にあり、彼等は仕事の面での自由競争によって実力を示すことが唯一の生存の道であったことを併せて考えなければならない。当時の Liberalism は the completest individual freedom for every citizen who could contribute to the national wealth¹¹ を意味していた。物質力を誇るイギリス帝国にもっとも奉仕するのは、物質の生産者である実業家又は商人だったが、彼等は他人を制圧しなければ安全でなかった。企業の自由競争は彼等を事業に熱心な個人主義者にしたのである。彼等のそういう自己防衛的本能には当時の唯物論的な進化論の理念、The survival of the fittest meant survival of the best¹² という思想が作用したことも考えられる。

Mrs. Dombey must understand that my will is law, and that I cannot allow of one exception to the whole rule of my life¹³.

これは Dombey が自分の妻に対して要求することであるが、絶対者として相手に服従を強いる言葉である。又彼は一人息子の Paul に対して、How powerful money is, and how anxious people are to get it¹⁴ といっ

って金銭の力の大きさをさすのである。さらに当時の実業家や商人は自己保存本能を自分の事業の将来に託して表現した。自分の事業の永遠性と

いうことを強調し信じようとしたのである。これは生存競争のはげしい企業の世界に生きる実業家達にとって、彼等の内心の不安を打消そうという努力の現れと考えられるが、その当時のイギリス国民が自国の未来の繁栄と進歩を信じた自尊心 (the prevalent pride in material progress and prosperity)¹⁵ と共通したものがあると考えられる。

There is an eminence ready for him to mount upon. There is nothing of chance or doubt in the course before my son. His way in life was clear and prepared, and marked out before he existed.¹⁶

これは Dombey が一人息子の Paul に抱いている考え方である。Dombey にとって Paul は自分の事業の後継者であり Paul の存在は彼の事業の偉大性、永続性を先天的に具有したものでなければならない。この考え方の根本には多分に predestination 的思想がみられるのである。当時の実業家、商人が事業の偉大性、永続性を信じようとしたことは、理性的な判断から出ているのでなくむしろ信仰的であったといえる。

我々が Dombey の考え方をみてみて気づくことは一種の狂信的な確信と、その確信の裏付けとなっている人間および人間関係に対する無知である。精神的不具を思わせる無理解である。彼は息子の Paul に対して前述したような期待を抱いているが、その反面、娘の Florence に対しては女の子は彼の事業の後継者になり得ないという理由から、彼女を冷淡にあつかっている。彼が Paul に対して異常な期待をもっているのと同程度に、彼にとっては Florence は不必要な子供であった。

His feeling about the child had been negative from her birth. He had never conceived an aversion to her: it had not been worth his while or in his humour. She had never been a positively disagreeable object to him. But now he was ill at ease about her. She troubled his peace. He would have preferred to put her idea aside altogether, if he had known how. Perhaps — who shall decide on

such mysteries!—he was afraid that he might come to hate her.¹⁷

ここに述べられているのは正常な父親と子供の関係ではない。Florence が女の子に生れたという事実が Dombey にとっては彼女を negative に考える動機である。彼は Florence を憎んでもいないかわりに愛してもいない。彼等の間には感情の相互的交流がないのである。この不必要な存在は、しかし彼の神経を時々脅かす。こういう子供に対する考え方は到底常識では理解できない。この Dombey の考え方の根底にはあらゆる人間関係(家族をも含めて)を物質的論理で割り切ろうとする態度がある。一方 Florence は父親を愛している。彼女は機会をとらえて、父親になんとか自分の愛情を伝えようと努力するのである。そういう努力が Dombey を脅かし不安にする。

He knew now that she was beautiful; he did not dispute that she was graceful and winning, and that in the bright dawn of her womanhood she had come upon him, surprise. But he turned even this against her. In his sullen and unwholesome brooding, the unhappy man, with a dull perception of his alienation from all hearts, and a vague yearning for what he had all his life repelled, made a distorted picture of his rights and wrongs, and justified himself with it against her.¹⁸

Florence が次第に成長して一個の女性になっても Dombey のこのような考えは変らない。しかし一方では一人前の女性として彼女が持っている美しさは事実である。Dombey にとって、その存在を無視して来た彼女が彼の意志と関係なく成長し、美しくなるという事に自分の思わくと反した自然的経過を見て反感をもつ。このことは Paul がまだ幼児であるのに既に自分の後継者としての姿を予想していたのと逆の心理である。彼は Paul が死んだ後に Florence だけが成長して美しくなることに自然の成行が自分の意志と逆行している現実を見て腹をたてる。Florence を憎む気持は

そういう自分の意志に逆行する現実に対する反感からである。彼は娘の背後にある一般の世界から目をそむけようとするのである。

自分の子供も事業の発展にとって不可欠な要素として見なそうとする所に彼の認識の異常さがある。こういう Dombey を一般的に冷たい父親として非難することは正確でない。Dombey は Florence に対して冷淡な父親ではなくて、父親とは別のものなのである。Dombey は Florence が自分の子供であることを拒否しようとしているのである。

Dombey のこのような対人関係における異常さは子供に対してだけでない。彼は妻に対しても物質の世界を支配しているのと同じ態度でのぞもうとする。彼は先妻に死なれ Edith Granger と結婚しようとするが、その結婚観は純然たる「物を金で買う」といった考え方である。

‘You know he has bought me,’ she resumed. ‘Or that he will, to-morrow. He has considered of his bargain; he has shown it to his friend; he is even rather proud of it; he thinks that it will suit him, and may be had sufficiently cheap; and he will buy to-morrow. God, that I have lived for this, and that I feel it!’¹⁹

これは Edith の言葉である。彼女は結婚前に Dombey の物質的な考え方をすでに知っていた。彼女は Dombey のそういう方針に反抗するため、夫の意志にさからい連日外出しては金を浪費する。そういう彼女の態度は Dombey にとって彼の威厳を挫き、絶対者である自分に対する Edith の挑戦に見えたのである。

Mr. Dombey was resolved to show her that he was supreme. There must be no will but his. Proud he desired that she should be, but she must be proud for, not against him. As he sat alone, hardening, he would often hear her go out and come home, treading the round of London life with no more heed of his liking or disliking, pleasure or displeasure, than if he had been her groom. Her cold supreme

indifference — his own unquestioned attribute usurped — stung him more than any other kind of treatment could have done ; and he determined to bend her to his magnificent and stately will.²⁰

Dombey は Florence に対すると同じように Edith の中に自分の意志と逆行するものを見たのである。ここに見られる夫婦の不知も Dombey の対人関係についての認識不足が原因していると見てよい。

Dombey のこういう人間性を父親又は夫としてのモラルの面から批判することは危険である。前にも述べたとうり、実業家の彼にとっての考え方の規準は自己の優位性がいつも問題となっている。意志力と支配力が彼の意識のほとんどをしめているのである。

Dickens は Dombey 以外にも彼と同種類の人物をしばしば描いている。その代表的なものは *A Christmas Carol* (1843) の Scrooge である。彼も Dombey と同様に商人であり、物欲にかられ使用人その他に厳しくあたる人物である。Dombey の人間性を明確にするためにこの同種類の人物をとりあげ Dombey と比較してみたい。

Dickens が *A Christmas Carol* をかいた目的はこの作品のタイトル、さらに Scrooge が三度にわたる幽霊の感化力によって改心して善良な人物になる、という物語からして、クリスマスに象徴されるキリスト教精神の感化力の偉大さである。Scrooge が善人に生れかわるという話は Dickens の、人間の性は本来善であるという人間性に対する信頼感を暗示している。

Nobody ever stopped him in the street to say, with gladsome looks, ‘My dear Scrooge, how are you? When will you come to see me?’ No beggars implored him to bestow a trifle, no children asked him what it was o’clock, no man or woman ever once in all his life inquired the way to such and such a place, of Scrooge. Even the blind men’s dogs appeared to know him ; and when they saw him coming on, would tug their owners into doorways and up courts ;

and then would wag their tails as though they said, ‘No eye at all is better than an evil eye, dark master!’

But what did Scrooge care! It was the very thing he liked. To edge his way along the crowded paths of life, warning all human sympathy to keep its distance, was what the knowing ones call ‘nuts’²¹ to Scrooge.

これは Scrooge が強欲で人に嫌われていることを描いている所である。描写は他人からの厳しい批判，それに対する Scrooge の反撥という型でおこなわれているが，この部分は見方によれば Scrooge の社会からの離反と孤立の立場を述べていると考えられる。とくに後半の所 ‘But what did Scrooge care! It was the very thing he liked.’ という所に社会から疎外された彼の居直った態度があらわれている。前述したように，この作品は物欲のために損われた人間性が回復することを語っているのであり，Scrooge という商人の物質主義にもとづく人間性そのものを分析するのが目的でない。しかし，Dickens は所々で Scrooge の側に立って彼と社会の一般大衆との距離を測定することによって，暗に物質主義的人間性の孤立した姿を見極めようとしている。Dombey の場合は Dickens は実業家，商人の人間性そのものをテーマにしたのであるが，*A Christmas Carol* のような人間回復をテーマとする救いと希望のある作品においても，無意識的に Scrooge と周囲の人々との断絶に目をむけているのである。（Dombey の場合は前に述べたように彼自身の心理が周囲との交流を拒み，Scrooge の場合は周囲の方からの批判による孤立といえる）。

Dombey と Scrooge とはそれぞれの作品のテーマは異なるし主人公の描きかたも異なるけれども，同一の原因のために周囲の人々から孤立するという立場は共通している。物質と金銭の力を信念として生きる人間が他の人間たちと正常な人間関係をもちにくいことが，いずれの場合も示されているのである。

次ぎに Scrooge と Dombey のちがう点である。彼等はともに物質の世界に生きる同種類の人物であるし、それぞれ社会一般から孤立した存在である。しかし、二人の間には作品のテーマ、目的、Dickens の人間理解の仕方の違いなどによって若干の相違が生じている。

はじめに Scrooge と Dombey の人物としての描き方のちがいである。

Oh! but he was a tight-fisted hand at the grindstone. Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous, old sinner! Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster. The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue; and spoke out shrewdly in his grating voice.²²

これは Scrooge の描写である。一見して明瞭なことは文中のさまざまな形容詞からでもわかるように、彼にむけられた激しい非難の書き方である。squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous などという同質の言葉をかさねている。これは Dickens が Scrooge の物欲にこり固まった人間像を極端な形において描こうとしたためと考えられる。さらに、その人間像はもっぱら外面的姿勢に集中しているのである。The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait. というように彼の容貌の上に内心の物欲がいかに現われているか、ということである。世間の嫌われものになっている Scrooge の醜悪な容貌を描いている。Dickens は世間の人々に Scrooge はどう映るか、ということを問題としているわけである。Dickens と世間の人々との立場は若干異なると考えられるが、彼も世間の人々とほとんど同じ立場でそういう Scrooge を批判的に見ていると考えてよい。

Dombey の人間性はそのほとんどが彼の内面心理の説明によって描かれている。彼と彼の家族の人々との人間的交流が欠けているということは、

前にいくつか引用したように彼自身の心理的動きによって述べられている。Scrooge の場合のように外面からの批判という型をとらないで、Dombey の内側に立った彼の意識の描写だけである。たとえば、彼と娘の Florence との関係も彼自身の特異な Florence に対する見方のために生じる彼女との異常な人間関係、それを Dombey 自身がどのように受取っているか、ということが中心になっている。すべての人間関係は Dombey の解釈をどうして観察されているのである。このことは作者の人間に対する見方の変化を意味している。Scrooge に対するように非難的に、教訓的にみるのではなくて、Dombey の人間性を自我意識の問題としてみつめる態度である。Dombey のような立場におかれた人物が外界に対してどう反応するかが作者の関心の的である。この Scrooge と Dombey とに対する Dickens の見方の違いは *A Christmas Carol* と *Dombey and Son* の二つの作品の全体的意味の違いと関係していると思われる。

Scrooge と Dombey とが異なる第二の点は彼等の人間性に対する作者の考え方の違いである。彼等の人間性がそれぞれの作品でどのように作者によって解釈されているかである。これは前述の Scrooge と Dombey の描写のしかたと関係していることがらである。Scrooge は彼の強欲な人間性にもかかわらず最後には三回にわたる幽霊の出現により正常な人間性に回復する。

‘I will live in the Past, the Present, and the Future!’ Scrooge repeated, as he scrambled out of bed. ‘The Spirits of all Three shall strive within me. Oh Jacob Marley! Heaven, and the Christmas Time be praised for this! I say it on my knees,...!’

He was so fluttered and so glowing with his good intentions, that his broken voice would scarcely answer to his call. He had been sobbing violently in his conflict with the Spirit, and his face was wet with tears.

これは物語のおわりの方の Scrooge の懺悔の言葉である。このような Scrooge の変化については種々議論があるが、彼の真の人間性の回復はそれまで彼のためにひどい目にあわされた人々（彼の下で働らいていた事務員の Bob Cratchit とか Scrooge の甥の Fred 等）にとって仕合せである以上に、Scrooge 自身にとって救いとなっている。Dickens はこの作品では Scrooge の変化によって彼に救いをあたえているのである。A *Christmas Carol* は当時の実業家、商人の極度な物質主義と個人主義に対する批判であったが、この作品ではそういう醜い人間性も場合によって回復するという作者の念願を示している。又、人間の回復の仲介をしているのが Ghost である。Scrooge にとって Ghost は自分を救済した divine grace²⁴ になっているといえる。A *Christmas Carol* だけでなく、それまでの Dickens の作品では何らかの型で主人公にこういう divine grace があたえられているのである。たとえば *Oliver Twist* では Oliver の苦境を救って彼を養なう紳士 Mr. Brownlow であり、*The Old Curiosity Shop* (1840) の場合は Nell 自身の純真な魂が divine grace といえよう（この場合は人間の内在的な divine grace である）。このことは *Dombey and Son* 以前の作品では Dickens は人間の救いというものが人間の内在的な型にしる、外在的な型にしる何らかの意味で存在しうる、という考えを抱いていたために外ならない。

Dombey and Son においては A *Christmas Carol* の中のこの divine grace にあたる存在が明確には示されないのである。Dickens はただ *Dombey* の外界に対する心理的反応を観察するだけにとどめ、いかなる解釈も付していない。しかし、A *Christmas Carol* の中の Scrooge と Ghost の関係のように、たえず主人公と対立関係（又は相対的關係）にあり主人公の意識の上に有形、無形に作用してくる強力な対立的要素は明らかに存在している。*Dombey and Son* の中の ‘railway’ がそういう *Dombey* の意識に対する対立的力となっているのである。ただこの対立的存在は

Dombey にとって決して divine grace でなく、むしろ逆である。*Dombey and Son* の中の ‘railway’ が従来どうりの divine grace になっていない所が *A Christmas Carol* と *Dombey and Son* の作品全体としての意味の違う所であり、Dickens の人間観が変化したことを示唆する所でもある。

Dombey and Son の中には railway の敷設、ヴィクトリア時代の人々の新しい railway に対する考え方等が描かれている。そしてこの railway は物質文明の一つのシンボルとしてのみならず、当時の人々が railway すなわち物質文明について、どのような考えをもっていたかを示す仲介となっている。*A Christmas Carol* において Ghost が Scrooge の精神の変化を示す仲介になっているのと同じ意味で、railway はその当時の人々（その典型的な人物として *Dombey* が描かれている）の精神内容を映していると考えてよい。

There was no such place as Staggs's Gardens. It had vanished from the earth. Where the old rotten summer-houses once had stood, palaces now reared their heads, and granite columns of gigantic girth opened a vista to the railway world beyond. The miserable waste ground, where the refuse-matter had been heaped of yore, was swallowed up and gone; and in its frowsy stead were tiers of warehouses, crammed with rich goods and costly merchandise. The old by-streets now swarmed with passengers and vehicles of every kind: the new streets that had stopped disheartened in the mud and waggon-ruts, formed towns within themselves, originating wholesome comforts and conveniences belonging to themselves, and never tried nor thought of until they sprung into existence. Bridges that had led to nothing, led to villas, gardens, churches, healthy public walks. The carcasses of

houses, and beginnings of new thoroughfares, had started off upon the line at steam's own speed, and shot away into the country in a monster train.²⁵

この文章は railway の出現が新しい時代を画したことを示している。それまでの古い社会はこの railway によって一掃された。railway は建設的な意味をもった前途有望な物質文明のシンボルである。しかし、一方では railway はそれまでの古い良いものまでも破壊してゆく力でもあった。人々は一面では railway の建設的な力をよろこんだが、反面、未知のこの力に対して不安と恐れをもったのである。

The power that forced itself upon its iron way — its own — defiant of all paths and roads, piercing through the heart of every obstacle, and dragging living creatures of all classes, ages, and degrees behind it, was a type of the triumphant monster, Death. . . .

Through the hollow, on the height, by the heath, by the orchard, by the park, by the garden, over the canal, across the river, where the sheep are feeding, where the mill is going, where the barge is floating, where the dead are lying, where the factory is smoking, where the stream is running, where the village clusters, where the great cathedral rises, where the bleak moor lies, and the wild breeze smooths or ruffles it at its inconstant will; away, with a shriek, and a roar, and a rattle, and no trace to leave behind but dust and vapour: like as in the track of the remorseless monster, Death!²⁶

最後の Death! という言葉に人々が感じていた不安と恐怖が明らかに示されている。railway によってそれまでの英国の美しい風景、自然が破壊されてゆくが、これを人間性の面からみると物質文明によって英国人の淳朴な精神が次第に侵されてゆくことを暗示しているのである。ヴィクトリア時代の人々は一面では物質文明を誇っていたけれども、他面、物質文明

によって自分たちが本来の姿を失ってゆくことに不安も持ったのである。

Dickens は *Dombey and Son* の中の railway によって、当時の人々の物質文明に対する明と暗という二面的な心理を示そうとしたと考えられる。

このような当時の英国人と物質文明との相互作用的影響は *Dombey and Son* の主人公 Dombey が自分の物質的富と力に対してもっている自信と、その裏にかくされている不安の心理とまったく同じである。考え方によれば、Dombey の人間性と彼の物質的富と力の関係は、当時の物質的社会と人間との関係の縮図なのである。Scrooge と同じく Dombey は当時の英国の実業家、商人の典型であるが、Scrooge の場合彼が Ghost という divine grace によって次第に本来の人間性を回復するというテーマは、Dickens が当時の社会と人間に対してもっていた一つの人間肯定的な回復についての念願を示したものである。*Dombey and Son* においては Dombey と railway とのつながりによって、Dickens は今一度当時の社会と人間の関係を暗示し、物質万能時代の人間の姿を描こうとした。ただし、それは Scrooge と Ghost との関係のような人間の回復を示唆するものでなく、物質の力の方が人間の精神より優勢で人間は物質に対して不安を感じながらも、否応なしにその力に動かされてゆく、という人間の回復を絶望的に見た考え方に変っているのである。

Dombey の彼の息子 Paul に対する超自然的な期待、又、娘 Florence に対する常規を逸した冷淡さ等は Dombey 自身の本来の考えから出ているというよりも、彼が生活している社会の影響とみるべきである。人間としての Dombey よりも物質の力に支配された彼の第二の天性が彼をして Paul に異常な期待を抱かしめているのである。同様に Florence に対しても物質の力を絶対とする彼の意識が Florence の父としての肉親の感情を圧倒しているから、彼女が一個の女性に成長することに反感を持ったり、彼女の愛情を煩わしく思ったりするのである。

One child was gone, and one child left. Why was the object of

his hope removed instead of her?

The sweet, calm, gentle presence in his fancy, moved him to no reflection but that. She had been unwelcome to him from the first; she was an aggravation of his bitterness now. If his son had been his only child, and the same blow had fallen on him, it would have been heavy to bear; but infinitely lighter than now, when it might have fallen on her (whom he could have lost, or he believed it, without a pang), and had not. Her loving and innocent face rising before him, had no softening or winning influence. He rejected the angel, and took up with the tormenting spirit crouching in his bosom.²⁷

この文章に描かれている Dombey の心理は正常な人間（父親）の心理ではない。Dombey の Florence がいなければよいと願う心理を肉親のモラルの面から批判することは、彼の人間性がその当時の時代思潮の影響のもとに形成されていることを無視した考え方である。Dombey の中には彼の本来の人間性と、それと相争うかたちの彼の第二の天性ともいべき唯物的人生観が同時に存在していた、とみなすべきである。上の文章の中の the tormenting spirit crouching in his bosom というのは、その直前の He rejected the angel. という文章からもわかるように、自分に天使のように優しい Florence を娘として愛情をもってみようとする彼本来の人間性と、彼の唯物的な第二の天性との争いの結果もたらされる苦悩の状態と考えてよいのである。

It was a trouble to him to think of this face of Florence. . . .

Because the feeling it awakened in him — of which he had had some old foreshadowing in older times — was full-formed now, and spoke out plainly, [moving him too much, and threatening to grow too strong for his composure.²⁸

この文章においては Florence の顔のことを考えることが苦痛である彼の心理が示されている。ここでは Florence を単に女の子として憎む気持は語られていない。本来の肉親的感情のために彼女を愛する気持が必然的におきてくる場合、その感情に抵抗し、なんとかそれを抑えたい心理である。彼はそういう肉親的な気持を極度に警戒し、拒否しようとするが次第に不安になってくるのである。

当時の一般の人々が物質文明に対して感じていた不安感はかならずしも Dombey が自分の物質主義的人生観のために娘に対して感じる不安感と同じものとはいえない。しかし、社会的問題としては英国人一般が物質文明に懐疑的になりかけている時期に、個人的問題としては、自分の娘に対して肉親的愛情と実利主義的思想の板ばさみのために苦しんでいる Dombey のような人間像が存在することは、一種の因果関係と考えられる。社会的な問題が個人の生活感情の上に反射されてくるのである。

Dombey と railway との関係がもっとも明瞭に描写されているのは彼が友人の Major Bagstock と汽車で旅行する途中である。彼は車中で亡き息子の Paul のこと、あとにのこった Florence の成長ぶりなどを考えながら、自分の期待と次第に食い違ってくる現実を憎み、あらゆる現象が彼の意志と逆行するかのようで絶望的心理状態におかれるのである。

As Mr. Dombey looks out of his carriage window, it is never in his thoughts that the monster who has brought him there has let the light of day in on these things: not made or caused them. It was the journey's fitting end, and might have been the end of everything; it was so ruinous and dreary.

So, pursuing the one course of thought, he had the one relentless monster still before him. All things looked black, and cold, and deadly upon him, and he on them. He found a likeness to his misfortune everywhere. There was a remorseless triumph going on

about him, and it galled and stung him in his pride and jealousy, whatever form it took: though most of all when it divided with him the love and memory of his lost boy.²⁹

ここでも、ふたたび汽車は the monster といわれている。今の Dombey の心理から見れば自分をのせて進んでゆく汽車は自分の現実に対する憎しみとか絶望感を運んでいく monster である。All things looked black, and cold, and deadly upon him, and he on them. というのは車中の彼の孤立した心理状態と彼が自分のそういう状態を憎む反撥の気持を語っている。汽車の到着した終点は Dombey にとっては the end of everything を象徴しているように見える。こういう Dombey と railway の関係を見てみると、Scrooge と Ghost との関係と全然違うことが理解できるのである。Ghost が Scrooge を現在、過去、未来の三つの世界に運んでいる途中に Scrooge におとずれるのは次第に彼を本来の人間性に回復さす今までの自分に対する後悔の情である。しかし Dombey の場合は不安感とか絶望感が汽車の進行とともに増大してくるだけである。ともに主人公がある方向に連れてゆくけれども Dombey にとっては railway は divine grace とはまったく逆の monster 以外の何物でもない。

A Christmas Carol と Dombey and Son とがかかれた年代はわずかに5年しかへだたっていない。しかし、二つの作品のそれぞれの主人公の見方は根本的に異なっている。前者には救いがあり後者にはそれが見あたらないのである。Dickens は A Christmas Carol をかいた当時においてはヴィクトリア時代の社会と人間の関係はまだ絶望的でないと考えていたと思われる。物質との戦いにおける人間性の優勢に期待をかけていたのである。しかし、Dombey and Son の時代になって彼は物質主義は単に人間の外的生活を変化するのみならず、人間の意識にまで侵入してくること、さらに、人間はその場合自分の本来の人間性を完全に見失なうのではないが、社会的な圧力で特定の人間形成を強いられるために、本来の自分と後

天的な自分との間に分裂状態がおこり、これが人間を永久的に苦しめるものであることを示しているのである。人間は外的な物質の世界に次第に圧迫されて、それによって自我を形成されるというプロセスは必然的なものであることを暗示していると考えられる。

以上のように *A Christmas Carol* と比較して *Dombey and Son* が人間の回復性についての絶望、外界の力の必然的な人間に対する拘束性、人間のそれに対する屈服等を描いていると考えるのであるが、最後に、Dombey が作品の一番終りの部分で突然に善良な老人となり、今まで冷淡にしていた Florence と和解して平和な日々をおくるという変化について考えたい。

Mr. Dombey is a white-haired gentleman, whose face bears heavy marks of care and suffering; but they are traces of a storm that has passed on for ever, and left a clear evening in its track.

Ambitious projects trouble him no more. His only pride is in his daughter and her husband. He has a silent, thoughtful, quiet manner, and is always with his daughter.³⁰

我々は *A Christmas Carol* の Scrooge の変化については何も不自然さを感じないが、このような Dombey の変化に対しては突然な感じと、作品のテーマの上からは蛇足という印象をもつのである。こういう *A Christmas Carol* と *Dombey and Son* のそれぞれの主人公の変化についての説得力の違いは、今まで述べて来た二つの作品のテーマ、二人の人物の描かれ方と関係しているのである。

A Christmas Carol の Scrooge は前に述べたように描写が外面的な彼の容貌、態度に集中している。このことは作者が彼のような強欲な商人を視覚的に誇張して描くことによって誰にでもわかる典型的な人間のタイプ

を設定するためである。作品全体の背景はクリスマスという一種の民話的な世界である。Scrooge も又民話とか童話の中に出てくる可能性をもつ人物とみることが出来る。我々は Scrooge が変化することについては、そういう民話のもつ超自然性として抵抗を感じないのである。Dickens が人間の性を善と信じクリスマスという設定の中で、一人の人間が奇蹟的に回復する物語をかいたのは、すべての人々の心の中にある民話の説得力を信じたからである。

A Christmas Carol をかりに民話的とすると *Dombey and Son* は全く異質である。たいていの場合、民話とか伝説にはその趣旨として教訓的又は道徳的要素が程度の差はあっても織り込まれている。*A Christmas Carol* についていうならば Dickens が本来の人間性の回復をこの作品で念願したとすれば、それは当時の強欲な実業家とか商人に対する批判を前提としたものである。*A Christmas Carol* は作者の教訓的又は道徳的立場でかかれたことは明らかである。一方 *Dombey* のたとえば Florence に対する冷淡な態度は作者の前提とか判断なしで、ただ特異な環境のもとで形成された意識は、時として自分の娘に対してもこのように働らくものである、ということが冷静に語られているにすぎない。そこには作者の道徳的判断はないのである。*Dombey* の Florence に対する心理について肉親としてのモラルの立場からの批判が危険なのは、彼の意識が外界からの圧迫を前提としていることを考えあわせる必要があるからである。Scrooge の場合を教訓的又は道徳的立場とすれば *Dombey* は客観的な人間観察の立場である、ということが出来る。外からの影響の反応として心理がみられ、それがどのように第三者に作用しているかという見方は Scrooge に見られるような民話と教訓の世界でなく、客観的な人間研究の立場とってよいのである。

Dombey が最後に善良な父親に変化することについては Taine の Mr. Dombey ‘becomes the best of fathers, and spoils a fine novel.’³¹ という

批判がある。spoils a fine novel とはこういう冷静な人間心理の研究のプロセスの中に突然作品の論理的発展を無視して善良な父親として Dombey が出現することが、それまでの作品の内容と完全に矛盾していることを語っているのである。Dombey and Son は人間の心理を冷静に観察している作品であって、Scrooge 的变化が予想される作品ではないのである。

注

1. David Thomson, *England in the Nineteenth Century*, (vol. 8 of "The Pelican History of England", 1950), pp. 113-114.
2. Steven Marcus, *Dickens from Pickwick to Dombey*, (London: Chatto & Windus, 1965), pp. 313-314.
3. Ford and Lane, *The Dickens Critics*, (New York: Cornell University Press, 1961), p. 260.
4. Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties*, (London: Oxford University Press, 1954), pp. 195-196.
5. David Thomson, *England in the Nineteenth Century*, p. 100.
6. Charles Dickens, *Dombey and Son*, (London: The New Oxford Illustrated Dickens, 1960), p. 480.
7. David Thomson, *England in the Nineteenth Century*, p. 101.
8. *Ibid.*, p. 32.
9. ルイ・カザミアン, イギリスの社会小説 (1830-1850) (石田憲次, 白田昭共訳, 東京, 研究社, 昭和33年), p. 200.
10. David Thomson, *England in the Nineteenth Century*, p. 227.
11. *Ibid.*, p. 226.
12. *Ibid.*, p. 106.
13. Charles Dickens, *Dombey and Son*, p. 595.
14. *Ibid.*, p. 133.
15. David Thomson, *England in the Nineteenth Century*, p. 106.
16. Charles Dickens, *Dombey and Son*, p. 139.
17. *Ibid.*, p. 29.
18. *Ibid.*, p. 561.
19. *Ibid.*, pp. 393-394.
20. *Ibid.*, p. 562.
21. Charles Dickens, *A Christmas Carol*, (London: The New Oxford Illus-

- trated Dickens, 1960), p. 8.
22. *Ibid.*, p. 8.
 23. *Ibid.*, p. 71.
 24. Edgar Johnson, *Charles Dickens, His Tragedy and Triumph*, vol. I. (New York: Simon & Schuster, 1952), p. 489.
 25. Charles Dickens, *Dombey and Son*, pp. 217-218.
 26. *Ibid.*, pp. 280-281.
 27. *Ibid.*, pp. 282-283.
 28. *Ibid.*, p. 282.
 29. *Ibid.*, pp. 281-282.
 30. *Ibid.*, p. 873.
 31. Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties*, p. 171.